

## 目次

日中社会学会大会第25回大会にあ  
たって・・・・・・・・・・p1  
日中社会学会第25回大会をお受けす  
るにあたって・・・・・・・・・・p2

シンポジウム(2) 紹介・・・・・・・・p4  
大会プログラム・・・・・・・・p5  
事務局からのお知らせ・・・・・・・・p10

### ■日中社会学会大会第25回大会にあ たって

陳立行

(日中社会学会会長・関西学院大学)

このたび成城大学において、第25回大会  
が開催されます。まずは関係者の皆様のご尽  
力に深い感謝の意を表したいと思えます。

成城大学で開催の運びとなりました経緯  
は以下の通りです。2011年の東日本大地震  
後、二年連続で関西での大会開催となり、本  
年度は関東でも開催が望まれました。おりし  
も昨年、西原先生が成城大学へご赴任され、  
成城大学での開催をお願いしましたところ、  
快く引き受けていただきました。

3年前(2010年)、私は会長のバトンを受  
けてから、中国研究はもちろん、比較研究を  
通じた中国社会、日本社会、さらに東アジア  
社会に潜むメカニズムの解明及び学会の研  
究成果の海外発信を進めてきました。2011  
年、会員の比較研究に関する論文がイギリス  
のLSE(London School of Economics and  
Politics)の中国比較研究(CCPN)に転載さ  
れ、英語での欧米社会への発信の第一歩が踏  
み出されました。

2011年の人類史上未曾有の東日本大地震  
は日本のみならず、全世界、特に近隣の中国

の強い関心を引きつけております。四川大地  
震という大きな災害を経験した中国では、国  
境や人種を越えて、生命の尊重という普遍的  
価値に基づいた日中両国の相互理解と相互  
扶助の機運が高まりつつあります。そんな中、

本学会は北京日本学研究中心と共同で  
『東日本大震災とその後——災害・復興・防  
災の日中比較を通じた新しい社会の模索』と  
題する研究プロジェクトを立ち上げたところ、  
幸運にも国際交流基金の知的交流会議プ  
ログラムの助成を受けることができました。

続く2012年には、本学会は『グローバリ  
ゼーション・インパクトの日中比較』という  
テーマで研究プロジェクトを継続すること  
ができました。ところが2012年9月頃から  
日中関係が厳しい状況に陥り、多くの会員の  
中国での現地調査や共同研究に支障が生じ  
ました。しかしながら、政治と外交の対立が  
激しくなる時期にこそ、日中両国の間に研究  
者同士の交流を積極的に行うことで、民衆の  
相互理解に力を尽くして努力することが本  
学会の役割と責務であると自覚し、多くの会  
員の方々とともに、知恵を出しあいながら研  
究交流活動を続けていきました。その結果、  
2013年3月には東京で、『グローバリゼーシ  
ョン・インパクトの日中比較—リスク・信  
頼・モダニティと21世紀東アジア社会の行

方一』と題する国際シンポジウムを開催することができました。またこのシンポジウムには、学会員はもちろん、中国からの研究者や、日本の一般市民の方々も参加していただくことができました。さらに 2013 年には、本学会の研究成果を中国の研究者と一般の方々へ積極的に発信するために、本学会の研究プロジェクトチームと中国の共同研究者たちが力を合わせて、中国語で『地震・救援・重建の中日比較研究』という著書を 2013 年 5 月に中国で出版することができました。

近年、新興の大国として、中国は世界と近隣諸国への影響が益々増大しております。そのような中、中国社会に関する研究は 21 世紀の社会科学の大きな課題としてあり続けています。本学会では、近年、中国社会の中に、中国固有のいわゆる「Chineseness」なるものが存在するの否か、存在するというのなら、それはいかなるものなのか、さらにそれは東アジア諸国と如何なる関係を持つものなのか、という論点に対して多様な論争がおこなわれています。今第 25 回大会における二つのシンポジウムもともにこの「中国的なるもの」と深くかかわるテーマです。「中国的なるもの」を理論的に解明することは容易ではなく、特に流動性が増しつつあるグローバル時代においてそれを解明するのはさらなる困難が存在していますが、会員たちの学問的な挑戦と勇気に期待し、またそのチャレンジ精神こそ本学会の誇りであると感じています。

一方、中国ではここ 30 年間の高度経済成長によってもたらされた社会問題が山積になっておりますが、本学会の自由報告にも、人口移動、家族の変容、コミュニティの変化など、これら中国社会のホット・イシューに関する発表が多く、その成果が期待されます。

またこれまでは本学会の慣例として、開催

校に所属されている、優れた研究者の方を特別講演者としてお招きし、講演を依頼してきました。今年度は日本社会学会前会長、矢澤修次郎先生にご講演を引き受けていただきました。矢澤先生の講演テーマは『文明の社会学からみた中国と日本』と題するものですが、この講演を通じて、近代化における東洋文化と西洋文明の衝撃の後、社会がいかなる方向へ変容していくか、変容していく中で、「中国的なるもの」と「日本的なるもの」がどのように現れてきたかのかなについて、ご示唆をいただけるものと大いに期待しております。

最後に、初めての中国人の会長として、これまで力が及ばなかった点が多々あるかと思えます。この 3 年間、理事の皆様、心強いサポートと会員の皆様の温かいご支援をいただくことにより、未曾有の自然の災害と日中両国の厳しい政治的対立の中、学会の新しい取り組みと研究活動を順調に進めていくことができました。この場をお借りして、心からの感謝を捧げさせていただきたく思います。

## ■日中社会学会第 25 回大会をお受けするにあたって

### (開催校シンポジウム (1) 及び

### 特別公演の紹介)

西原和久(成城大学)

ご案内のように 2013 年 6 月 1 日(土)と 2 日(日)に、東京世田谷の成城大学で、日中社会学会が開催されますので、開催校から一言、ご挨拶申し上げます。

成城大学は、成城学園として 1917 年に小学校が開設され、その後に旧制 7 年制高等学

校として、そして戦後に新制大学として発足しました。そうした経緯から同じ旧制高校の仕組みをもっていた学習院大学、成蹊大学、武蔵大学とともに「四大学」と呼ばれ、現在でも「四大祭」などが行われて交流があります。

社会イノベーション学部は、成城大学の旧短期大学部を改組再編して2005年に発足した新しい学部です。この学部は政策イノベーション学科と心理社会学科からなります。社会学は心理社会学科の心理学とともに一方の柱となっておりますが、社会学研究者は文芸学部のマスコミ学科などにも複数の教員がおります。

さて、開催校は、大会初日に講演とシンポジウムを企画することになっております。そこで、講演は成城大学社会イノベーション学部の設立から柱となり、本年3月末日に定年退職された矢澤修次郎先生にお願いしました。矢澤先生は、皆さまご存じのように、長らく一橋大学で教鞭をとられ、前期の日本社会学会会長を務め、また国際社会学会 (ISA) でも大活躍され、2014年ISA横浜大会の招致にも奔走された日本を代表する世界的な社会学者です。ご研究は幅広く、プラグマティズム研究をふまえた『現代アメリカ社会学史研究』、パーソンズの『社会類型一進化と比較』や最近ではカステルの『インターネットの銀河系』などの翻訳もあります。今回は「文明の社会学」という視点から日中に論及して下さるとのことで、たいへん楽しみにしております。

次に開催校シンポジウム「日中交流の現在—東アジア共同体の可能性を問う」に関してですが、その企画着想の経緯とねらいを記させていただきます。このシンポ企画は、直接の経緯としては、(結果的に実現はしませんでした) ISA横浜大会に向けた英語セッ

ジョン・プロポーザル「Going beyond Political Tensions and Cultural Differences: The Possibilities of Building an East Asian Community」が基になっております。2012年9月以来の日中関係の緊張関係に関しては多言を要しないでしょうが、こういう時期だからこそ、日中交流の過去と現在を見つめ直し、社会文化面からの東アジアの連携の可能性を探っていきたく考えました。昨年秋に上智大学で矢澤先生などが中心になって進めてきた第10回東アジア社会学会議があり、そこにおいて中国の社会学者から「領土問題の解決のためには東アジア共同体の構築が必要だ」といった趣旨の報告があり、会議全体が大いに盛り上がりました。今日、政治的な対立はきわめて残念なことです。経済的かつ社会文化的には日中間には緊密な関係が出来上がっております。それを着実に発展させていくことが東アジアの連携にとって重要な鍵となるはず。なお、登壇者は新旧の会長をはじめ、このテーマにふさわしい方々を選ばせていただきました。「東アジア共同体」という発想の是非も含めて、東アジアの未来を展望する社会学的検討がこれを機に活性化することを望んでおります。

成城大学は、敷地は広くはありませんが、小さな池もあり、緑豊かな都市型大学です。また成城は高級住宅地としても知られております。この機会に、学内およびその周辺の散策も楽しんでいただければと思います。どうか、よろしくお願い申し上げます。

## ■ シンポジウム (2) 紹介

### 「chineseness の『発明』」

報告者：

「近代中国における商業印刷物・月份牌の生成と展開」

于曉妮(神戸大学大学院)

「国家主導のチャイニーズネス形成とその困難—民国期の武術団体・中央国術館を事例に—」

池本淳一(早稲田大学)

「The Invention of Chineseness or The Inventiveness of Chineseness: A critique of the critique of essentialized Chineseness」

王向華(香港大学)

コメンテーター

：石井健一(筑波大学)

南誠(長崎大学)

司会

：根橋正一(流通経済大学)

浅野慎一(神戸大学)

ここ数年、本学会シンポジウムで多様な論争が展開されてきたが、そのたびに論争の俎上にあげられ、しかも十分に議論を深めきれないまま先送りされてきた一つの論点がある。それは、中国の固有の特徴、「中国的なるもの」は果たして存在するのか、そして存在するとすればいかなる社会学的意義をもつのかという論点である。

人の移動、環境、地域社会、政治、文化、経済、福祉、家族など、現代中国のあらゆる社会諸現象の根底に、一方でグローバル化の普遍的潮流が、そして他方で強烈な「中国的なるもの」が複雑に入り組んでいるように

思われる。

もとよりこうした「中国的なるもの」は、少なくともある程度まで近代になってから発明・構築された比較的新しい伝統であろう。またそれは、中国の内在的伝統というより、近現代の世界システムにおける中国の相対的位置に根ざすものかもしれない。

中国ではなく、世界各地に移動した中国系移民が移動先で「chineseness」なるものを創造したという見方もあるだろう。あるいは欧米が一種のオリエンタリズムを含むまなごしから「chineseness」を定義・発明したという見方も、一面の真理を突いているだろう。

しかしそうしたある種の外在的規定をいくら列挙したとしても、近現代の中国に住む中国人が、現実生活とそれを貫く一定の文化様式を主体的に構築してきたという事実は否定しようがない。そしてその存在を抜きにして、世界システムもオリエンタリズムも、そして近現代社会すらも、実は成立しえなかったのである。

今、私達が感じ取っている「中国的なるもの」が発明・構築される過程を正面から確認し、しかもそれが現代の中国社会・世界社会に与える意義や陰影について考察しておくことは、今後、さまざまな領域の日中社会学研究に有用な基盤的知見・知的刺激をもたらすと思われる。

本シンポジウムでは、近現代の「中国的なるもの」の生成・展開に焦点を当て、その現代的意義について、多角的に議論を深めたい。

報告

文責・浅野慎一(神戸大学)

# 日中社会学会第25回大会プログラム

開催日：2013年6月1日、2日

会場：会場：成城大学3号館2階および1階

(注) プログラムは一部変更となる可能性があります。

当日会場にて配布される資料でご確認ください

## 6月1日(土)

10:30～受付開始

成城大学3号館2階

大会参加費：会員1000円、非会員2000円（ただし学生は1000円）

11:00～12:30 理事会

32Lゼミ室

13:00～13:05 開会式

321教室

開催校挨拶：古川良治（成城大学社会イノベーション学部学部長）

会長 挨拶：陳立行（関西学院大学）

司 会：西原和久（成城大学）

13:05～14:30 記念講演

321教室

講演者：矢澤修次郎（一橋大学名誉教授）

題 目：「文明の社会学からみた中国と日本」

14:45～17:15 開催校シンポジウム

321教室

「日中交流の現在—東アジア共同体の可能性を問う」

発表者：

「東アジアにおけるグローバリゼーションと日中関係」 黒田由彦（名古屋大学）

「『小伝統』を基礎とした東アジア共同体に向けて—アジアからのパラダイム転換—」

中村則弘（愛媛大学）

「儒教の価値から見た東アジア共同体の困難」

陳立行（関西学院大学）

討論者：首藤明和（兵庫教育大学）・李妍焱（駒澤大学）

司 会：西原和久（成城大学）

17:20～18:20 総会

321教室

18:30～20:30 懇親会

3号館1階ホール

懇親会費：学生3000円、一般4000円

6月2日(日)

8:30～ 受付開始

3号館1階

9:00～10:30 自由報告(1)

セッションA

321教室

司会 賽漢卓娜(東京外国語大学)

「女子労働者の利用商業施設と地域移動体験—中国大連経済開発区を事例として—」

陳 蕭蕭(流通経済大学)

「中日国際結婚についての社会学研究—日本都市部における中日国際結婚家族への着目」

胡 源源(大阪大学)

「中国都市における伝統的コミュニティの変容—深圳の城中村を事例として—」

連 興檣(神戸大学)

セッションB

311教室

司会 細萱 伸子(上智大学)

「中国都市部の少子化と子育て支援ネットワーク—北京調査を事例に—」

郭 莉莉(北海道大学)

「家庭内における父親の養育行動と青年期の子どもの学業達成

—中国山西省の固定給有層と固定給無層の比較から—」

劉 楠(お茶の水女子大学)

「中国における競争メカニズムの導入の必要性—高等教育構造の視点からの」

李 尚波(桜美林大学)

セッションC

312教室

司会 根橋正一(流通経済大学)

「満鉄の日本人経営漢字新聞とその経営者について

—『盛京時報』社長佐原篤介の新聞経営を中心に—」

華 京碩(龍谷大学)

「現代中国におけるスポーツと社会階層—各種体育系学校の比較調査を通じて—」

池本 淳一(早稲田大学)・陳 宝強(西南大学)

「『毛沢東・鄧小平・江沢民』は皇帝か

—皇帝制度・政策・統治・権力・世襲(後継指名)・祭祀・等の観点から—

宮内 紀靖(瀋陽師範学院)

10:40~12:10 自由報告(2)

セッションD(科研セッション)

321教室

司会 陳立行(関西学院大学)

「現代中国の『家族問題』—『家族圏』を通じた現状と課題の考察」

首藤明和(兵庫教育大学)

「韓国と台湾の対日観・外国イメージの比較」

石井健一(筑波大学)

コメンテーター: 桜井義秀(北海道大学)

セッションE

312教室

司会 李妍焱

“Making Creators: an Anthropological Perspective from a Production Company in Japan”

張滯方(香港大学)

「北京市における中高齢者市場に関する考察—2012年社会学的面接意識調査に基づく」

聶海松(東京農工大学)

「中国都市部における養老施設入居者の生活と福祉—西安市での調査を事例に」

劉念(神戸大学)

12:15~13:15 理事会

32Lゼミ室

13:30~16:00 シンポジウム(2)

321教室

「Chinesenessの『発明』」

発表者:

「近代中国における商業印刷物・月份牌の生成と展開」 于曉妮(神戸大学大学院)

「国家主導のチャイニーズネス形成とその困難

—民国期の武術団体・中央国術館を事例に—

池本淳一(早稲田大学)

“The Invention of Chineseness or The Inventiveness of Chineseness: A critique of the critique of essentialized Chineseness”

王向華(香港大学)

司会: 根橋正一(流通経済大学) 浅野慎一(神戸大学)

コメンテーター: 石井健一(筑波大学) 南誠(長崎大学)

16:00~ 閉会式

321教室

研究理事: 根橋正一(流通経済大学)・浅野慎一(神戸大学)

開催校理事: 西原和久(成城大学)

## ■ 大会出欠確認のお願い

同封の葉書にて、大会出欠のご予定をお知らせください。50円切手をご用意いただき返送をお願いいたします。開催校の準備のため、5月20日（月）までに投函をお願いいたします。

## ■ 宿泊施設について

成城大学・成城学園駅周辺には残念ながらホテルがありません。

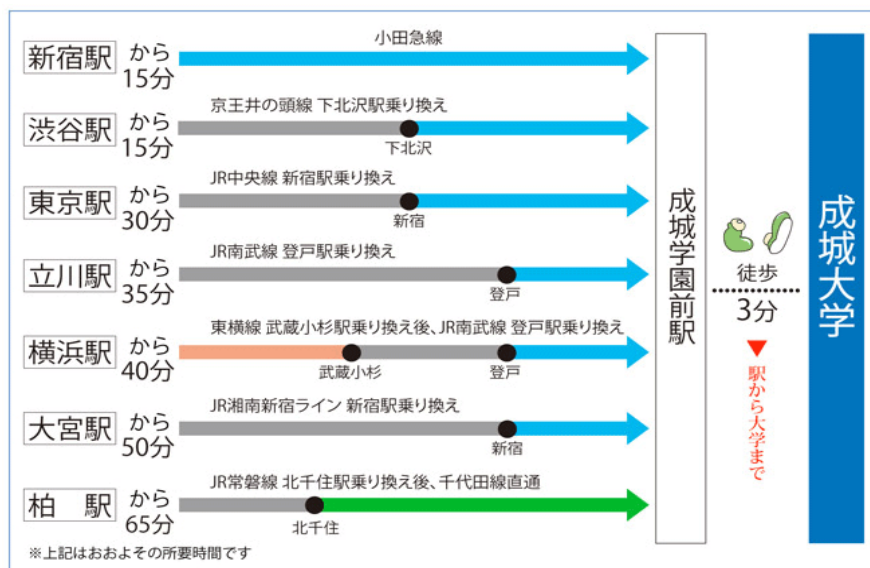
新宿、あるいはJR山の手線の、池袋、高田馬場あるいは渋谷あたりは少し高めですが、さまざまなホテルがあります。また、中野・高円寺・阿佐ヶ谷といった10分程度で新宿に出られるJR中央線沿線の駅には、比較的小規模のリーズナブルな宿があります。さらに、小田急線の町田、あるいはJR南武線の武蔵小杉（この場合は登戸で乗り換えて5分で成城学園駅です）あたりにも、手ごろなホテルがあります。

## ■ 大会連絡先

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

成城大学社会イノベーション学部 西原研究室（電話：03-3482-1528）

## ■ 成城学園駅へのアクセス



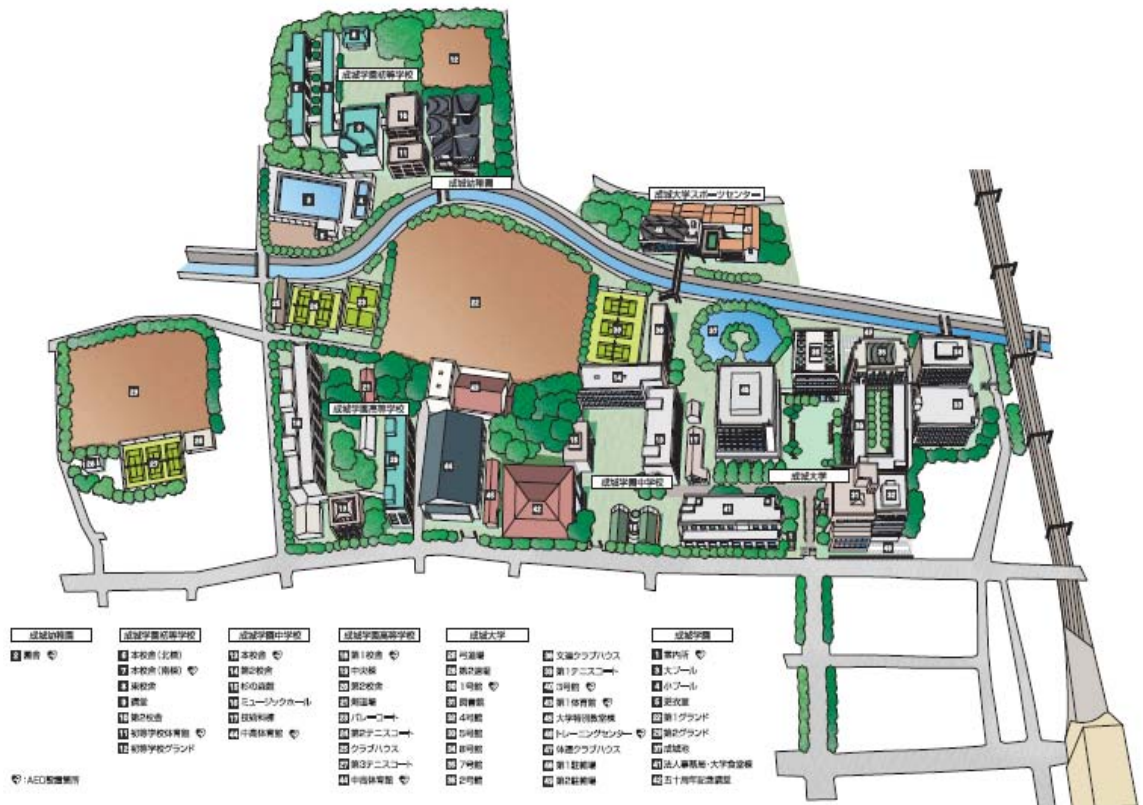
## ■ 成城学園駅から成城大学の会場までの道順

成城学園駅の北口を出て、北へ100m、信号を右折し100mで成城大学正門に着きます。正門を入ってすぐの中央広場の左手8階建ての建物が会場となる3号館です。主会場は2階にありますので、3号館入口左手の階段をご使用ください。





■ 大学構内地図



## ■事務局からのお願い

- ・メルマガ届いていますか？

本学会では、メーリングリストによる広報を行っています。事務局へご登録いただいたメールアドレスへ、「日中社会学会メールマガジン」が配信されます。

登録がまだの方、また、メールアドレスに変更のあった場合は、事務局までお知らせください。

## □情報をお寄せください

会員の皆様で、出版物のご案内や研究会・シンポジウムの開催のご案内などがございましたら、事務局まで情報をお寄せください。

## □異動、住所変更の際はご一報を！

新年度となり、異動、住所変更のあった方は、新しいメールアドレス、郵便物送付先を事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。

## 日中社会学会ニューズレター No.68

編集：池本 淳一

(早稲田大学)

発行：日中社会学会事務局

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学・南裕子研究室

[info@japan-china-sociology.org](mailto:info@japan-china-sociology.org)

[yminami@econ.hit-u.ac.jp](mailto:yminami@econ.hit-u.ac.jp)

tel: 042-580-8810 (研究室直通)

fax: 042-580-8799 (共同研究室の

ため南宛を明記してください)

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式 HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2013年5月